

 コスモ石油株式会社

C ' S M A I L

VOL. 57

株主通信 《シーズ・メール》 SPRING 2008





和光大学経済経営学部教授

岩間 剛一氏

Kouichi Iwama

コスモ石油株式会社代表取締役社長

木村 彌一

Yaichi Kimura

成長分野に経営資源をシフトし 収益力を強化することで 企業価値を向上させていきます

今回は、資源エネルギー関連の専門家としてテレビの経済番組や専門誌などでご活躍されている和光大学の岩間剛一教授をお招きして、国内外のエネルギー事情やコスモ石油の経営環境、今後の成長戦略などについて、当社木村彌一社長と意見交換をしていただきました。

高騰する原油市場の 動向について

木村▶ エネルギー関連の専門家として、現在の原油価格の高騰の背景などについて、先生はどのようにお考えですか。

岩間▶ 原油の高騰について、最初の契機となったのは2003年のイラク戦争かと思います。当時1バレル約30ドルであったニューヨークの原油先物市場が今年1月に100ドルを超えるなど高止まりが続いています。開戦から5年が経ちますがイラク国内の治安は依然として不安定で、中東地域の政情不安は続いています。また、産油国自身の資源ナショナリズムも高まり、石油資源を国有化するなど原油

生産を阻害するような要因になっている面もあります。

木村▶ 世界的に見た石油製品の需給バランスについて中長期の見通しはいかがですか。

岩間▶ 現在は中国やインドなどの経済が急成長しており約30億人の人間が石油を利用するようになり、石油消費量が大きく伸びる要因となっています。しかし、原油の在庫水準という面で見ますと10年前とさほど変わっておらず、需給面で大きな逼迫はありません。現在の原油価格の高騰を牽引している大きな要因のひとつは、ニューヨークの原油先物市場です。サブプライムローンという米国の信用力の低い個人向け住宅ローン問題により、金融市場に不安感が高ま

り、ヘッジファンドなどの投資マネーが金融商品から原油先物市場に大きく流入してきたことが影響を与えていると思います。

木村▶ 国内の石油市場について先生の見解はいかがですか。

岩間▶ 日本は人口減少社会に入り、市場全体が縮小するのに伴い石油製品の販売も減少しています。現在の豊かさを次世代に繋ぐため、今は大きな分岐点に当たります。そのなかで経済の基盤を支えている石油会社の果たすべき役割は大きいと思います。

IPICとの提携による 事業展開

岩間▶ 原油価格の上昇により中東産油国が豊かになり、政府系

資源小国である日本にとってアラブ首長国連邦は非常に重要な国。今回の提携は、国のエネルギーの安全保障というものに大きく貢献すると思います。



●岩間剛一氏プロフィール

東京大学法学部卒業、東京銀行（現三菱東京UFJ銀行）入行。東京大学工学部非常勤講師などを経て、2003年から和光大学経済経営学部教授。主な著書に「『ガソリン』本当の値段」（アスキー新書）など多数。

ファンドも積極的に海外に投資しています。コスモ石油も産油国のファンドからの出資を受けられましたが、この目的などについて教えてください。

木村▶ アブダビ首長国政府が100%出資しているエネルギー関連の投資会社IPIC*に当社の第三者割当増資を受けてもらいました。これは、当社最大の原油調達国であるアラブ首長国連邦（UAE）と強固なパートナーシップを築いていくことで、長期的な安定供給体制の確立を図ると共に、製油所の高度化や海外販売、石油開発事業、新規事業などを共同で推進していくことで競争力・収益力を強化していくことを目的としています。また、安定的な財務基盤の強化にも繋がります。

岩間▶ 資源小国である日本にとってUAEは非常に重要な国だと私は考えています。今回の提携は、コスモ石油にとっての原油の安定的な調達に留まらず、日本全体にとっても、エネルギーの安全保障というものに大きく貢献すると思います。また増資によって自己資本比率が向上し、財務基盤が強化されたことは投

資家にとっても嬉しいことですね。ところで、共同で進めている事業とは、どのような案件があるのでしょうか。

木村▶ IPICの国際的なネットワークと潤沢な資金に当社の経営資源を組み合わせることで、既存の事業展開に加え、成長分野での新たな共同事業の展開を計画しています。石油化学事業を含めた製油所の更なる高度化を進めることや、米国西海岸を含めた環太平洋市場での石油製品販売事業の拡大、アブダビ首長国以外での原油開発事業の強化なども図りたいと考えています。またALA事業などの新規事業や、LPG事業などの拡大も検討中です。更にIPICが既に提携している海外企業との連携も視野に入れています。

供給体制の高度化 海外販売（輸出）の拡大

岩間▶ 国内の需要構造が変わっていく中で、どのような対応をお考えですか。

木村▶ まず、国内の製油所の高度化のための投資を行っています。現在、国内の石油市場は産業構造の大きな変化に伴い、ガ

互いの国の文化を

深く理解し合うことから

強固な信頼関係が築かれ、長期的な

ビジネスに繋がると考えています。

ますが、確かに米国の製油所は、装置構成も軽質原油用の精製施設が中心ですので、中東地域で増産があっても精製できません。中東の重質原油が精製でき、環境規制にも対応できる日本の製油所は大きく貢献できると思います。

木村▶ 現在、米国西海岸で貯蔵タンクの確保や国内の出荷栈橋などの増強を進めています。現状で年間約150万キロリットルの輸出量を、2010年頃には年間400万キロリットル程度まで拡大していく計画です。

原油開発の 拡大施策について

岩間▶ 日本は資源小国で、石油や天然ガスのほとんどを輸入に頼っていますので、エネルギー資源の安定確保は、国策として大切です。ただ、輸入だけに頼るのではなく、油田の自主開発を推進することで、エネルギーセキュリティを担保していくことも重要です。コスモ石油も長年原油開発に取り組まれています

が、現在の状況はいかがですか。
木村▶ 当社は中東のアブダビ首長国で子会社のアブダビ石油

ソリンや軽油・灯油といった白油の需要が高くなってしまし、産業用の重油の需要が減少しています。その需要の変化に合わせて、精製段階でより多くの白油を作る装置構成にする必要があります。堺製油所に約1,000億円を投資し、重質油分解装置群を建設中で2010年からの稼働を目指しています。これにより、割安な重質原油を原料に白油を増産することで精製マージンの改善を図っていきます。

岩間▶ 堺製油所から増産される石油製品の将来的な販路はどのようにお考えですか。

木村▶ 国内の石油市場は縮小傾向になると予想していますが、海外に目を向けると石油事業は有望な成長産業です。アジア、オセアニア、米国といった環太平洋地域では、石油需要が大きく高まっています。それらの地域の中で環境規制が厳しい地域に当社の高品質の石油製品の輸出を強化することで販路を拡大していきます。今は米国西海岸地域へカーブ軽油*の卸売りも始めています。

岩間▶ 今後中東で増産される原油は重質油が中心と言われている



コスモ石油株式会社
代表取締役社長
木村 一

(株)が40年に亘り、原油生産を続けています。持分法適用会社の合同石油開発(株)も当地で生産をしています。また、カタールでは2006年から子会社のカタール石油開発(株)が原油生産を開始し、現在は日量約5,000バレルの生産量となっています。近く10,000バレルまで増産する予定ですが、2010年には更に3,000バレルの追加増産も計画しています。

岩間▶ 湾岸諸国の方たちは日本人に対する尊敬の念を強く持っています。天然資源がほとんどない日本が人材を活用することで高度成長を続けてきたことを高く評価しています。ただ、そのなかにも石油会社など産業界の方たちとの文化交流も大きく寄与していると思います。

木村▶ 当社も産油国との文化交流は長年続けてきました。技術者の交流だけでなく、日本の伝統文化の紹介や留学生の受け入れなどを行ってきました。昨今、中東での日本文化の高まりもあり、UAEの公立小学校に日本語の先生を派遣し、日本語教育プログラムの提供支援も始めました。やはり互いの国の文化を

深く理解し合うことから信頼関係が築かれ、長期的なビジネスに繋がると考えています。

岩間▶ 新しい鉱区での原油開発にも取り組まれていますね。

木村▶ 中東地域では、カタール政府と子会社のコスモエネルギー開発(株)が新たにブロック3鉱区の探鉱生産分与契約を結びました。また、豪州地域でも10年以上に亘り探鉱活動を続けていまして、1月に新たに北西沖チモール海域で探鉱開発プロジェクトに参加しました。

岩間▶ 現在、輸入している原油量のどの程度を自主生産されていますか。

木村▶ 足元では6%弱ですが、これを10%程度まで高めていく計画です。国内の石油需要が



緩やかに縮小していく状況で企業として成長していくには、上流の原油開発部門の拡大と石油製品の海外販売という2つの取り組みは、収益力を高める上でも重要な施策となっています。

SS販売における競争力強化

岩間▶ コスモ石油のCMをよく見聞きますが、SS(サービス・ステーション)における取り組みはいかがですか。

木村▶ 当社は「ココロも満タンに」というキャッチフレーズを長年使っていて、お客様の認知度はかなり高くなっています。これからは、これを具体的な形として提供していきたいということで、昨年から「ココロも満タンに」宣言。というキャンペーンを全国のコスモSSで始めました。宣言した以上は、それに応えるサービスをキッチリと提供して、お客様に満足していただくと同時にSSで働くスタッフの方にも生き生きと充実して働ける環境を作っていただくことが大切だと考えています。

岩間▶ 最近、セルフSSが増え

ていると思いますが、その辺の取り組みはいかがですか。

木村▶最初にセルフを始めた頃は、日本の風土には馴染まないのではという思いもありましたが、実際に取り組んでみますとお客様のニーズが大変高いことが分かりました。2007年12月末での当社のセルフSSは855件で全体の約2割を占め全国平均を大きく上回っています。

岩間▶給油をセルフにしてしまうと、整備などの車周りのサービスはどうなるのですか。

木村▶もちろん、セルフSSでもカーケアサービスは提供しています。整備や車検、オイル交換、タイヤなどのカーケア設備を持つ大型のキーステーションSSと周辺の中小SSをネットワーク化することで、お客様がどのSSに来店されても同じ品質のカーケアサービスが受けられる体制を整えています。

岩間▶最近の消費者はポイントが付くカード決済を好んで使っていますが、コスモ石油の取り



組みはどうですか。

木村▶当社は独自のコスモ・ザ・カードを発行していますが、イオングループと提携して新たにコスモ・ザ・カード・オーパスも並行して発行しています。カードの有効枚数は2007年12月末時点で298万枚を越えました。もちろんポイントも付きますのでお客様に大変喜ばれています。とくにセルフSSでカード決済するお客様は6割近くあり、稼働率が高いのが特長です。

新規事業の 取り組みについて

岩間▶石油事業以外の新規事業は、いかがですか。

木村▶石油とは違う分野ですが、動植物のヘモグロビンやクロロフィルの原料となるアミノ酸の一種でALAという活性物質を、環境にやさしく安価で大量に生産できる技術を開発しました。現在は植物の成長促進剤として農作物の肥料や塩性の強い沙漠の緑化事業などに応用しています。

岩間▶それは、世界に貢献できる事業になりそうですね。

木村▶ALAを活用した農業技術を通じて、持続可能な地球環境の実現に向けた食糧の増産、バイオマスエネルギーの利用など将来的に幅広い分野で貢献できればと思っていますし、医薬の分野での応用も期待されているところです。

岩間▶景気に停滞感が出てきた日本経済の中で、将来に向けて様々なビジョンを計画し、実践されているコスモ石油に今後益々の発展を期待しています。

用語解説

●IPIC

International Petroleum Investment Company。アラブ首長国連邦政府が100%出資しているエネルギー関連の投資会社。当社の第三者割当増資を引き受け、増資後約20%の当社株式を所有。

●カーブ軽油

米国カリフォルニア州大気資源局 (California Air Resources Board) に規定された環境規制をクリアした軽油。当社の軽油生産技術はこの規格をクリアしています。

第102期(2008年3月期) 第3四半期 財務・業績のご報告



代表取締役社長
木村 彌一

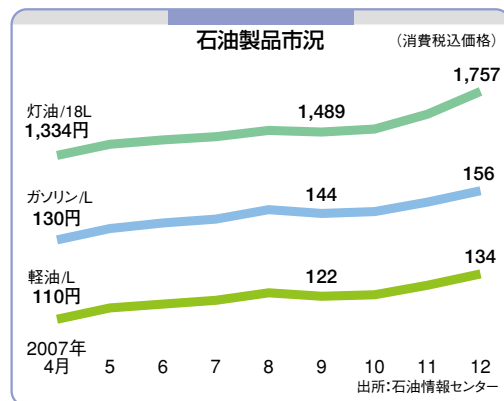
株主の皆様におかれましては平素よりご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。当社の第102期《2008年3月期》第3四半期の財務・業績の概要をご報告するに当たり、ごあいさつ申し上げます。

2007年度第3四半期の事業概要について

当第3四半期における経済環境は、米国発の金融市場の混乱などによる米国景気の低迷懸念が高まり、国内経済についても輸出産業などの減速感など先行き不透明感が増えています。

当社を取り巻く経営環境としては、原油の受入コストは1バレル72.01ドルと前年同期比8.07ドルの上昇、為替は1ドル117.29円と前年同期比1.09円円安で推移し、コスモ石油単体の国内燃料油販売数量は前年同期比101.1%となりました。

コスモ石油グループの経営成績については、連結売上高は、原油価格の上昇による販売価格の上昇で2兆5,405億円（前年同期比2,695億円増）となりました。連結営業利益は697億円（同225億円増）、連結経常利益は731億円（同



218億円増)、特別損益、法人税等を差し引いた連結四半期純利益は336億円(同157億円増)となりました。

当第3四半期の財政状態は、総資産は原油価格上昇によりたな卸資産や売掛債権などが増加したことで、1兆7,763億円となり前期末比1,971億円増加しています。

負債は、1兆3,008億円となり、前期末比833億円増加しています。純資産は、新株発行などにより4,755億円となり、前期末比1,139億円増加、自己資本比率は25.4%となりました。

コスモ石油の個別の業績は、売上高は、2兆3,753億円(前年同期比2,789億円増)となり

ました。営業利益は294億円(同220億円増)、経常利益は291億円(同231億円増)、特別損益、法人税等を差し引いた四半期純利益は185億円(同190億円増)となりました。

2008年3月期、通期の見通し

通期の見通しについては、1~3月期の原油価格を1バレル85.0ドル、為替を1ドル110円、通期の国内総販売数量を前期比101.4%とし、連結売上高は3兆5,900億円、連結営業利益は875億円、連結経常利益は900億円、連結当期純利益は370億円を予想しています。

コスモ石油の個別成績では、売上高は3兆3,300億円、営業利益は275億円、経常利益は250億円、当期純利益は150億円を予想しています。

株主の皆様には一層のご理解・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

連結業績ハイライト

(単位:億円)

	2007年度 第3四半期	前年同期比
連結売上高	25,405	2,695
連結経常利益	731	218
在庫評価の影響	420	344
連結四半期純利益	336	157

●連結経常利益 セグメント別内訳

	2007年度 第3四半期	前年同期比
石油事業	426	248
石油開発事業	337	-32
その他事業他	-32	2

2008年3月期の業績予想

(単位:億円)

(2008年2月6日発表)

●通期(2007年4月1日~2008年3月31日)

	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
単体	33,300	275	250	150
連結	35,900	875	900	370

要約四半期連結損益計算書

(単位:億円)

科目	当第3四半期 (2007.4.1~2007.12.31)	前第3四半期 (2006.4.1~2006.12.31)	増減
売上高	25,405	22,710	2,695
売上原価	23,615	21,189	2,426
販売費及び一般管理費	1,093	1,049	44
営業利益	697	472	225
営業外収益	167	148	19
営業外費用	133	107	26
経常利益	731	513	218
特別利益	78	30	48
特別損失	42	56	-14
税金等調整前四半期純利益	768	487	281
法人税等	397	270	127
少数株主利益	35	38	-3
四半期純利益	336	179	157

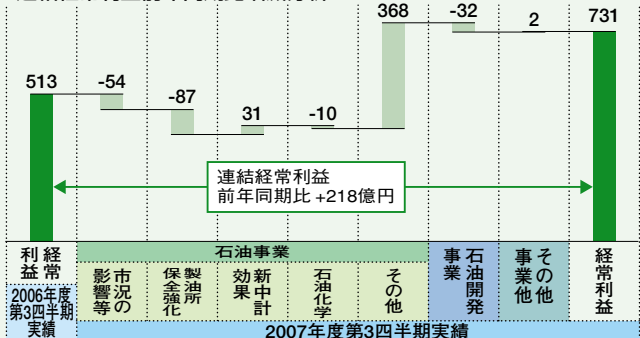
要約四半期連結損益計算書の当第3四半期、前第3四半期は億円未満を四捨五入しています。

販売価格の上昇により増収
在庫評価の影響などにより増益

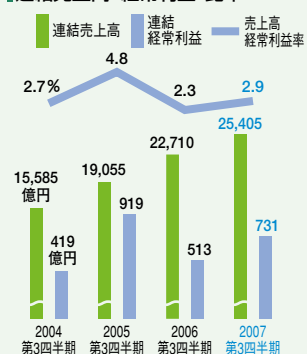
当第3四半期の売上高は、原油価格の上昇による販売価格の上昇などにより前年同期比2,695億円の増収。連結経常利益は731億円で前年同期比218億円の増益。この218億円の主な内訳は、市況の影響などで54億円のマイナス、製油所の保全強化で87億円のマイナス、石油化学のマージン縮小で10億円のマイナスとなりましたが、新・連結中期経営計画による収益改善が31億円あり、また在庫評価の影響による売上原価の押し下げなどで368億円の増益効果があり石油事業で248億円のプラス、石油開発事業は販売数量減などで32億円のマイナス、その他連結子会社などで2億円のプラスがあったことによるものです。連結四半期純利益は336億円となり、前年同期比157億円の増益となりました。

連結経常利益前年同期比増減分析

(単位:億円)



連結売上高・経常利益/比率



要約四半期連結貸借対照表

(単位:億円)

科目	当第3四半期末 (2007.12.31)	前期末 (2007.3.31)	増減
資産の部			
流動資産	10,796	8,821	1,975
固定資産	6,967	6,971	-4
有形固定資産	5,262	5,283	-21
無形固定資産	93	104	-11
投資その他の資産	1,612	1,583	29
資産合計	17,763	15,792	1,971
負債の部			
流動負債	9,465	8,118	1,347
固定負債	3,544	4,057	-513
負債合計	13,008	12,175	833
純資産の部			
株主資本	4,105	2,927	1,178
評価・換算差額等	398	470	-72
少数株主持分	251	219	32
純資産合計	4,755	3,616	1,139
負債・純資産合計	17,763	15,792	1,971

要約四半期連結貸借対照表の当第3四半期末、前期末は億円未満を四捨五入しています。

●資産の部

総資産は原油価格上昇によりたな卸資産や売掛債権などが増加したことで前期末比1,971億円増加しています。

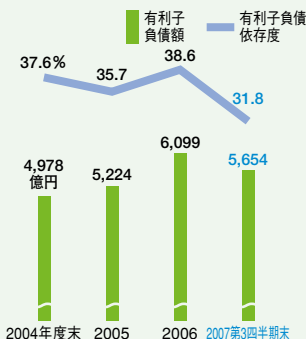
●負債の部

負債は、原油価格上昇によるたな卸資産の増加に伴い短期借入金や買掛金などが増加したことで前期末比833億円増加しています。

●純資産の部

純資産は、新株発行などにより前期末比1,139億円増加し4,755億円となり、自己資本比率は25.4%となりました。

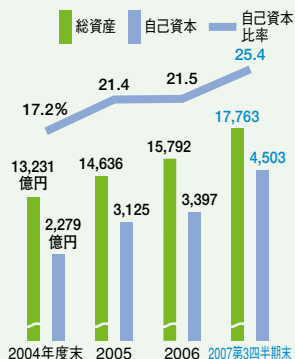
有利子負債額/依存度



1株当たり純資産



総資産・自己資本/比率



※ 2005年度以前は株主資本、株主資本比率を記載しています。

※ 自己資本＝純資産－少数株主持分

要約四半期連結キャッシュ・フロー計算書

(単位:億円)

科目	当第3四半期 (2007.4.1~2007.12.31)	前第3四半期 (2006.4.1~2006.12.31)
営業活動によるキャッシュ・フロー	-508	-422
投資活動によるキャッシュ・フロー	-188	-268
財務活動によるキャッシュ・フロー	386	739
現金及び現金同等物に係る換算差額	-6	0
現金及び現金同等物の増減額	-316	49
現金及び現金同等物の期首残高	1,261	566
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	1	—
現金及び現金同等物の期末残高	946	615

要約四半期連結キャッシュ・フロー計算書の当第3四半期、前第3四半期は億円未満を四捨五入しています。

原油コスト・処理量、稼働率、販売価格・数量

	単位	当第3四半期	前年同期比増減	
受入原油	原油 (FOB)	(ドル/バレル)	72.01	8.07
	為替レート	(円/ドル)	117.29	1.09
	受入原油代(税込)	(円/KL)	56,564	6,483
原油処理	原油処理量	(千KL)	20,857	747
	トッパー稼働率	(CD%)*	75.2	-1.5
	トッパー稼働率	(SD%)*	87.3	-3.4
販売価格	販売価格	(円/KL)	60,600	8,130

	単位	当第3四半期	前年同期比伸び率	
国内 販売数量	ガソリン	(千KL)	5,273	101.8%
	灯油	(千KL)	1,618	92.6%
	軽油	(千KL)	3,670	101.8%
	A重油	(千KL)	1,930	81.3%
	4品計	(千KL)	12,490	96.8%
	内需燃料油	(千KL)	20,589	101.1%
輸出数量	中間留分合計	(千KL)	1,169	153.8%
総販売数量	総販売数量	(千KL)	32,955	100.8%

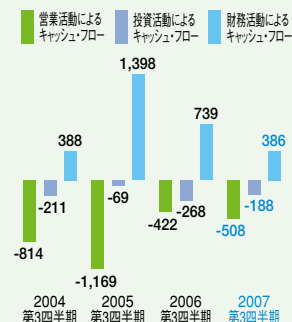
*CD%: 年間原油処理量 ÷ トッパー能力 ÷ 365日

*SD%: 年間原油処理量 ÷ トッパー能力 ÷ 実稼働日数

第3四半期末の現金及び
現金同等物残高は946億円

第3四半期のキャッシュ・フローは、営業活動は原油価格上昇によりたな卸資産や売掛債権などが増加したことなどで508億円のマイナス、投資活動は固定資産の取得による支出などで188億円のマイナス、財務活動は新株発行による収入及び借入金減少などで386億円のプラスとなり、当第3四半期末の現金及び現金同等物残高は946億円となりました。

活動別キャッシュ・フロー



現金及び現金同等物の四半期末(期末)残高

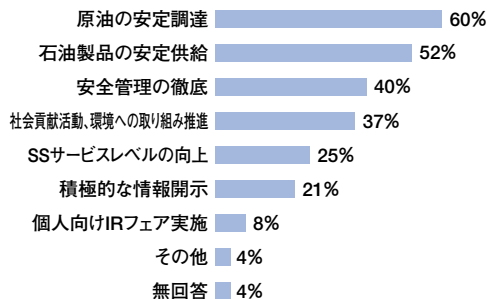


皆様からいただいたご質問にご回答させていただきます

シーズ・メール55号の読者アンケートでは7,000通を超えるご回答をいただき、誠にありがとうございました。カレンダーは準備していた4,000通を超える応募がありましたので、厳正な抽選の上、12月に発送させていただきました。今回は、アンケートの集計結果のご報告と、数多くお寄せいただいたご質問に対してご回答させていただきます。

「当社への要望」という質問に対して、原油高をご意識されてか60%の方が「原油の安定調達」とお答えになり、高い関心を示されました。以下、「石油製品の安定供給」が52%、「安全管理の徹底」が40%、「SSサービスペルの向上」が25%、事業面以外では、「社会貢献活動、環境への取り組み推進」が37%、「積極的な情報開示」が21%となりました。今回は、ご質問が多かった項目につきまして、事業の説明や当社の取り組みを紹介させていただきます。

■当社への要望（複数回答）



Q
1
原油開発はどのような取り組みをしていますか
(42歳 男性) — 他12名

A
1
当社は、調達する原油に占める自主開発原油の比率向上を目指し、原油開発・生産を推進しています。具体的には、子会社のアブダビ石油（株）と持分法適用会社の合同石油開発（株）が中東のアブダビ首長国で原油を生産し、カタールでは、子会社のカタール

石油開発（株）が2006年から商業生産を開始しています。また、豪州北西部でも原油生産のための探鉱作業を継続しています。

* 関連情報17ページ参照

●コスモ石油グループの原油生産量

	生産量(バレル/日)	当社出資比率
アブダビ石油(株)	23,288	63.0%
カタール石油開発(株)	5,290	85.8%
合同石油開発(株)	16,578	35.0%

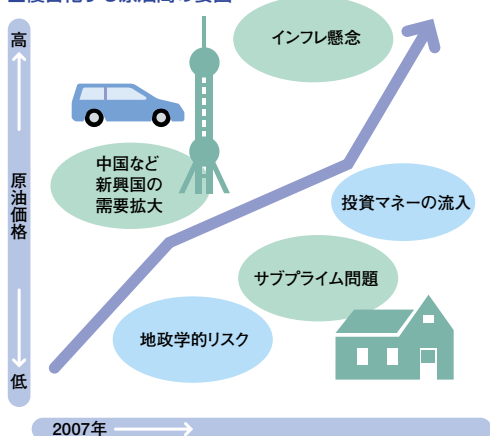
※生産量は2007年1～9月の平均生産量

Q₂ 原油高の背景について、教えてください
(52歳 男性) — 他18名

A₂ 原油価格は、産油国の供給量と消費国の需要量とのバランスで価格が決まるのが基本です。現在は、中国やインドなどの新興国の需要が大きく向上し、今後も需要は増え続ける予想です。更に産油国の政情不安も原油供給に対する地政学的リスクとして挙げられます。また、価格を決める大きな役割を演じているのが、原油の先物取引市場です。米国の信用力の低い個人向け住宅ローン問題を発し、年金基金や機関投資家の投資資金が金融商品から原油の先物取引市場に膨大

に流入してきたことも原油高に誘導している要因です。

■複合化する原油高の要因



※グラフの作成などについてはイメージで構成しています。

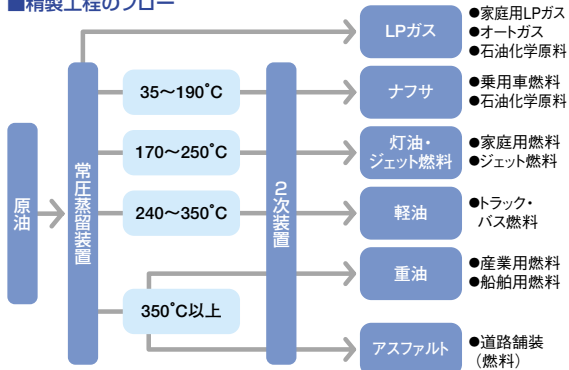
Q₃ 石油製品の製造工程などについて知りたいのですが
(33歳 女性) — 他12名

A₃ 産油国から搬送された原油は、幅広い沸点を持つ炭化水素の混合物で、製油所の精製装置を使って各石油製品に生まれ変わります。具体的には、常圧蒸留装置で原油を加熱し、沸点の違いを利用して油の蒸気にする事でLPガス（液化石油ガス）、ナフサ^{*}、灯油、ジェット燃料、軽油、重油、アスファルトといった各成分に分離します。更に2次装置を使い、硫酸化物、窒素酸化物などを除

去し、環境規制に対応したクリーンな燃料としてSSや工場、家庭などに販売しています。

※ナフサは、ガソリンの原料となるほかプラスチックなど、石油化学製品の原料としても利用されます。

■精製工程のフロー



Q

4

セルフSSの取り組みなどはいかがですか
(54歳 女性) — 他14名

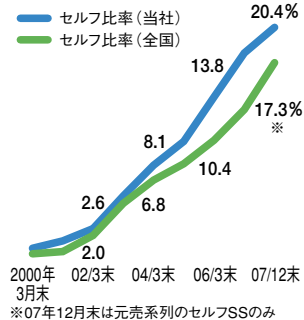
A

4

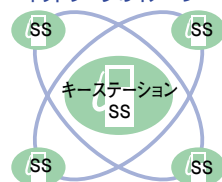
SS業態の多様化として、98年にドライバーが自ら給油作業を行えるセルフ給油式SSの規制緩和以降、今年で10年目になります。ドライバーニーズの高まりにより全国でセルフSSが広がっています。コスモ石油のセルフSSは07年12月末現在855SSで全体の20.4%となり、全国平均の17.3%を大きく上回っています。当社のセルフSSの特長としては車検や整備、オイル交換などカーケアサービスを提供できる大型のキーステーションSSを中核として

周辺の中小SSと連携するオートビークルネットワークを構築することで、ドライバーの皆様安心していただけるカーケアサービスを提供しています。

■セルフSS件数比率推移



■オートビークルネットワークのイメージ



※当社のセルフSSの検索はホームページをご利用ください。
<http://www2.cosmo-oil.co.jp/ss/search/index.html>

Q

5

SSで使えるカードについて
教えてください
(32歳 女性) — 他18名

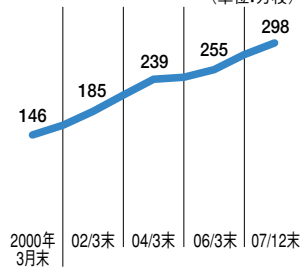
A

5

当社は、ドライバーの皆様の実便性を高めるため独自のクレジットカード、コスモ・ザ・カードを発行しています。給油やカーケア製品の購入時に便利なキャッシュレス精算ができる他、カード決済時に金額に応じてマイルが貯まるサービスも大変好評です。イオングループと提携したコスモ・ザ・カード・オーパスも発行しています。また、地球環境保全活動に貢献できる寄付が付いたコスモ・ザ・カード「エコ」、コスモ・ザ・カード・オーパス「エコ」も発行しています。お客様のご好評を得て、コス

モ・ザ・カードの有効枚数は07年12月末で298万枚と年々増加しています。

■コスモ・ザ・カード有効枚数推移 (単位:万枚)



コスモ・ザ・カード



コスモ・ザ・カード「エコ」



コスモ・ザ・カード・オーパス「エコ」

*コスモ・ザ・カードのお問い合わせ:

コスモ石油カードセンター、フリーダイヤル 0120-987622
携帯電話からは03-4330-1660

*コスモ・ザ・カード・オーパスのお問い合わせ:

北日本022-771-1500 東京043-296-6200
中部059-353-2100 大阪06-4863-0100
ホームページ: <http://www.cosmo-oil.co.jp/>

当社が発表した最近のニュースについて、主な項目と一部の内容をお知らせします。
 詳細は当社のホームページからご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.cosmo-oil.co.jp>

2008年

- 2月1日 カタール石油開発の原油生産の拡大について 環境対応を継続しつつ増産へ ①
- 1月30日 「コスモ絵かきっず ～ギャラリーツアー with MAYA MAXX～」を実施 ⑤
- 1月29日 豪州での探鉱開発プロジェクトへの参加 ③
- 1月29日 入院患者に心温まる時間を提供するための病院プログラム
「ハッピードール・プロジェクト」を実施
- 1月16日 ～美術館・博物館へ行こう～ A Day in the Museum を実施（協賛）
- 1月15日 SS販売促進プログラム「“ココロも満タンに” 宣言 2008」について

2007年

- 12月28日 「コスモ ディスカバリーアース」の番組配信スタート！
- 12月28日 長期入院中の子どもたちに励ましのメッセージを贈る
「コスモ・クリスマスカード・プロジェクト2007」を実施
- 12月17日 集光太陽熱プロジェクト コスモ石油、UAE政府系機関
東京工業大学による共同研究開発 ④
- 12月13日 公開買付への応募の結果に関するお知らせ
- 12月12日 コスモ子ども地球塾 「子どものための自然アートワークショップ
～センス・オブ・ネイチャー～」実施のご報告
- 12月11日 「チーム・マイナス6%」社内活動実績 約3,000人の社員が参加 ②
- 11月27日 「大阪ヨーロッパ映画祭 ～キンダーフィルム特集～」 特別協賛のご報告
- 11月26日 「ミュージシャンと音楽であそぼう！ ～ニューヨークからの贈りもの～」実施報告

※ニュースの内容により色分けしています トピックス／CSR・環境／IR／社会貢献&メセナ活動
 ※上記の日付はプレスリリース日です

1

環境対応を継続しつつ カタール石油開発の原油生産を拡大

当社の子会社、コスモエネルギー開発(株)が出資するカタール石油開発(株)は、既存鉱区における新規油田、A構造南部油田の開発計画についてカタール政府と合意し、開発計画に調印しました。カタール石油開発(株)は現在日量約5,000バレルの原油を生産、2008年3月までに約10,000バレルの生産を予定していますが、今回の新規油田開発で2010年には更に約3,000バレルの増産を計画しています。

▶ http://www.cosmo-oil.co.jp/press/p_080201/index.html

2

「チーム・マイナス6%」の 社内活動に約3,000人の社員が参加

当社は連結中期環境計画を策定し、全社を挙げた環境対応、二酸化炭素の排出削減に取り組んでいます。その活動の一環として、日本政府が推進する「チーム・マイナス6% 1人1日1kgCO₂削減キャンペーン」のホームページに、社内のデータベースをリンクさせる形で、社員一人ひとりが自主的に参加しており、昨年12月時点で約3,000人(コスモ石油グループ社員の約87%)の社員が活動に取り組んでいます。

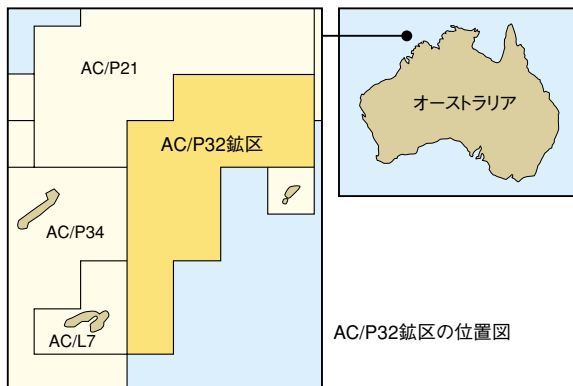
▶ http://www.cosmo-oil.co.jp/press/p_071211/index.html

3

豪州で探鉱開発プロジェクトへ参加

当社の子会社、コスモエネルギー開発(株)は従来から豪州地域で石油探鉱開発プロジェクトを進めてきましたが、1月に北西沖のチモール海でAC/P32鉱区の探鉱開発プロジェクトに新たに参加しました。すでにパートナー各社(海外企業5社)が探鉱を進めています。

▶ http://www.cosmo-oil.co.jp/press/p_080129/index.html



4

UAE政府系機関、東京工業大学と共同で 集光太陽熱の共同研究開発プロジェクトを推進

当社は、アラブ首長国連邦のアブダビ政府系機関であるMASDAR（アブダビ・フューチャー・エナジー・カンパニー）と



ムハンマドアブダビ首長国皇太子、福田首相及び両国関係関係の方々のご列席された契約調印式

共同で、東京工業大学と集光太陽熱発電技術開発のための共同

研究開発契約を昨年12月に締結しました。これは東京工業大学式ソーラービームダウン集光技術を実証し、太陽熱発電コストの更なる低減を目指す取り組みで、今年100kWの実証実験プラントを建設し、結果次第では、商業化プラントの建設準備に入る予定です。

▶ http://www.cosmo-oil.co.jp/press/p_071217/index.html

5

「コスモ絵かきっず ～ギャラリーツアー with MAYA MAXX～」を実施

当社は、児童養護施設で暮らす子どもたちの心の荒廃を防ぎ、元気と自信を取り戻してもらう社会貢献プログラムを継続的に実施しています。このプログラムに長期間ご協力いただいたアーティストのMAYA MAXXさんが米国に移住されることになり、1月に「コスモ絵かきっず ～ギャラリーツアー with MAYA MAXX～」を実施し、子どもたちにライブペイントを体感してもらいました。



子どもたちにライブペイントを指導するMAYA MAXX氏

▶ http://www.cosmo-oil.co.jp/press/p_080130/index.html

Cover Story

カバーストーリー

アブダビ首長国

アラビア半島の南東部に位置するアラブ首長国連邦（UAE）は、7つの首長国からなる連邦制となっており、その首都がアブダビ首長国です。UAEは日本の原油輸入量の約25%を担っていますが、UAEの石油のほとんどはアブダビ首長国から産出されています。表紙に描かれたエミレーツパレスホテルは、アブダビ首長国の迎賓館とも呼ばれており、年間を通じて多くの観光客が訪れています。

コスモ石油グループでは、子会社のアブダビ石油（株）が当地で40年に亘り原油の開発・生産を行っており、日本との様々な文化交流なども含め良好な関係を維持しています。

表紙イラスト 古田 忠男